五月の晴れた日のように

上埜紗知子

Sachiko Ueno

Come un Bel Di di Maggio

中公文庫

中公文庫

五月の晴れた日のように

定価はカバーに表示してあります。

1998年6月3日印刷
1998年6月18日発行

著　者　上埜紗知子

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Sachiko Ueno

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-203166-4　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

五月の晴れた日のように

上埜紗知子

中央公論社

目次

プロローグ　*Prologue*　11

第一幕　*Atto Primo*　17

前奏曲　*Prelude*　19

天から影が落ちて　*Come dal ciel precipita l'ombra*　22

たった一日で……　*E tutto un sol giorno cangiare pote*　27

ここがあの恐ろしい場所？　*Ecco l'orrido campo*　32

妙なる調和　*Recondita armonia*　37

もつれた結び目　*Questo e un nodo avviluppato*　46

じっと動かないで　*Resta immobile*　51

出口が見つからない　*Piu che cerco, men ritrovo questa porte sciagurata*　57

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

最初の太陽が私のもの　*Il primo sole e mio !* 63
私の力ではどうにもならない　*Ich zu schwach zu helfen bin* 71
さいは投げられた　*E gettata la mia sorte* 76
勝ちて還れ　*Ritorna vincitor !* 83
おだやかな夜に　*Quand le sera al placido* 89
なつかしい木陰　*Ombra mai fu* 94
手紙の二重唱　*Canzonetta sull'aria* 99
網にかかった蝶のよう　*Come una mosca prigioniera* 106
なんという優しさ　*Com'e gentil* 112
まだ、わからないのか？　*E non ti basta ancor* 116
これまでは無事に　*Jusqu'ici sans dangers* 120
胸さわぎ　*Ho il cor presga d'una sventura* 125

第二幕 *Atto Secondo*

朝はばら色に輝きて *Morgenlich leuchtend* 131

天からの声 *Una voce dal cielo* 133

あきらめないで *Non vi state a disperar* 138

衣装をつけろ *Vesti la giubba* 146

この心の光 *O luce di quest'anima* 151

もう聞こえない *Non ode piu!* 157

だれも寝てはならぬ *Nessun dorma* 162

もっと良い世界で *Lassu ci vedremo in un mondo migliore* 169

心身ともに疲れ果て *L'anima ho stanca* 175

第三幕 *Atto Terzo* 179

思いがけない曙光が *Inaspettata aurora in cielo appar!* 183

185

夢を見ているのかしら　*Sogno, o son desto?*　191
私の怒りを抑えるのは誰？　*Chi raffrena il mio furore?*　195
心は静まり　*Tranquilla l'alma sento*　199
どの道を選びますか　*E qual via sceglìete?*　202
眠れいとし児　*Enfant, permette qu'il s'achève! Dors! dors!*　209

間奏曲　*Intermezzo*
スプリング・ソナタ　*Spring Sonata*　217
見果てぬ夢　*Impossible Dream*　219
子猫のワルツ　*Cat's Waltz*　224
228

第四幕　*Atto Quarto*
憐れみと尊敬と愛　*Pietà, rispetto, amore*　235
237

舟歌は別れのとき　*L'heure des barcarolles, Et celle des adieux!* 241
時よとまれ　*Arrestati sei bello!* 245
女はみんなこうしたもの（?）　*Cosi fan tutte* 251
ヴィーヴァ・ラ・リベルタ！　*Viva la liberta!* 255
ドクターはすべてお見通し
A un dottor della mia sorte queste scuse, signorina 258
再　会　*Dich wiederzusehen* 262
もう、時間がない　*Piu tempo non ho* 266
私にはどんな望みが……　*Qual speme omai piu restami?* 272
ありふれた話　*E la solita storia* 278
お前は昇天の翼をひろげた　*Tu che a dio spiegasti l'al* 284

幕がおりてから *Epilogue* 289
忘れないでください *Di me non ti scordar!* 291
なんて優しいのかしら *Oh, quanto amore!* 297
君がみ声にわが心ひらく *Mon coer s'ouvre a ta voix* 303
運命の力 *La Forza del Destino* 309
行け、わが思いよ、黄金の翼に乗って *Va, pensiero, sull'alli dorate* 314
本文中のタイトルについて 321
あとがき 327
文庫本のあとがき *Curtain Call* 333
解説 五島雄一郎 339

中扉に使用の切り絵は広明さんの作品です

五月の晴れた日のように

Come un Bel Di di Maggio

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

プロローグ　*Prologue*

一人息子の広明がこの世を去った直後、心の支えを失った私の前に、なつかしいオペラの世界が何年ぶりかでひらけてきた。

折から日本列島は空前のオペラ・ブームの始まりの頃で、気がつけば音楽雑誌にはオペラの情報があふれ、テレビでは海外からの中継も多く行われている。ブームなどにならずとも、オペラはつかずはなれず私の心の片隅にいつも存在していた。

子供の頃からオペラに親しみ、主にヴェルディ、モーツァルト、プッチーニなどのイタリアオペラが好きだったが、多くの場合は旋律の美しさに酔いしれ、軽妙な演技やダイナミックな踊りなどを楽しむものであり、ストーリーや登場人物の心理など、現実をはなれた「絵空事」でしかなかった。

しかし、いま改めてオペラを鑑賞してみると、かつては人形劇や影絵のように幻想の世界であったオペラの中の人物の言葉や気持が、思いがけなく現実味を帯びてくる。甘美な旋律につつまれた歌が、実は、快い感動で心をとろかし酔わせるものばかりではなく、い

かに心をえぐる悲痛な心情や恐ろしい呪いの言葉を吐き出していたかということを、いまさらのように知らされる。

ああ、むごい運命！
私の希望は消えてしまった
娘を見つけ出したその途端
仇敵に奪われてしまうとは

（シモン・ボッカネグラ）

私はけっして人に、悪いことをしませんでした
それなのに、この苦しみのときに
どうして、主よ
私にこのような仕打ちをなさるのですか

（トスカ）

後悔が私を責めさいなむ
これからの人生を私は
苦い涙の中で悩んで過ごすのだ

（ランメルモールのルチア）

たった一日で
こうもすべてが変ってしまうものか！

（リゴレット）

そして中でも、リゴレットの、娘に語りかける言葉は時として、私の心と重なり合い、身につまされる。

お前は私の命だ！
この世にお前がいなければ、私に何の生きがいがあろうか。
私にとっては、宗教も家族も故郷も、全てお前の中にあるのだ。

道化としてマントヴァ公爵の宮廷に仕えるリゴレットは、一人娘のジルダをもてあそんだ好色家の主人に対する復讐に燃え、闇で出会った殺し屋に公爵暗殺を依頼する。嵐の夜、陰惨な殺戮は行われ、リゴレットは死体の入った袋を受け取るが……。

このリゴレットの深い愛情と悲哀を私にはっきりと感じさせてくれたのは、現代イタリアオペラ界屈指のバリトン歌手、シェリル・ミルンズ *Sherrill Milnes* であった。

リゴレット、シモン・ボッカネグラ、ジェルモン、モンフォルテ、フィリッポII世……、ヴェルディのオペラにおける父親は皆悲しい。若くして結婚したが、四年とたたないうちに、妻とおさない二人の子供をすべて失ったというヴェルディの不幸と悲しみと父性愛は、時を超えてミルンズの歌の中によみがえり、さざなみのように静かにおしよせ、あるいは燃えるような激情を伴ってほとばしり迫ってくる。

公爵の死体が入っていると信じて受け取った袋の中にリゴレットが見たものは、胸に深手を負って、いままさに息絶えんとする娘であった。捨てられてもなお公爵を愛し続けるジルダは、身代りとなって殺し屋の凶刃を胸に受けたのである。娘だ！　と叫ぶミルンズの悲痛な声は、刺客のナイフのように私の胸を深く突き刺す。驚愕し、混乱して、リゴレットは必死に呼びかける。娘よ、口をきいてくれ。だれがお前をこんな目に遭わせたのだ。死なないでくれ、かけがえのないわが娘よ……。

本来のミルンズの歌声は彼の性格そのままに、力強く、明るく、生命力に満ちている。ひとたび悪役ともなればその声は凄味を帯び、シニカルで冷酷な人物を平然と演じたりもする。しかし、父親を演ずるときの声はとろけるように甘く、胸がしめつけられるほどにせつない。

子供を失った親にしかわからない悲しみを、なぜミルンズはこれほど見事にとらえ、訴

えることができるのだろう。

ヴェルディは、人間の意思を超えた大きな力が世界を動かしているという観念を持っていたという。それは彼のオペラの重要なモチーフの一つともなっている。人の力の及ばない運命の力に支配されて、栄光の座に、あるいは破滅へと導かれていく登場人物たち。

そしてそのモチーフは、広明の二人の主治医が口にした「だれも悪くなかった。何も悪くなかった。運命としか言いようがない」という言葉と相通ずるものがある。十九世紀の芸術家と二十世紀の科学者が同じ概念を私に語りかける。

ヴェルディのオペラは、ほとんどが暗く悲惨な結末を迎えるが、善人の死はどこか救いを覚えるように整えられている。この世に真の喜びや希望はなく、天上にこそ安らぎはあるという。この世でひきさかれた恋人たちは天国で結ばれることを夢見る。毒を盛られた総督は、再会した娘のしあわせをみとどけてから、その腕の中で息絶える。愛する人の身代りとなって死んでいく少女や革命家たちは、苦しみの中にも満たされた思いを抱く。

けれど、苦悩と悲哀の中にとり残される者たちにほとんど救いはない。生き永らえて苦しみ続けるがよい、と突き放すがごとく、非情の幕は降りる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com